右近
さゝれ石
関寺小町
二人祇王
浮舟

十七

右近

次第 空方の山風長閑成て雲井の花そ
久しき 抑是ハかしまの神職
何某とハ我事也我此度都に上る
洛陽の名花残りなく一見仕て候又
北野右近の馬場の花ことに盛なる
由承り候間今日ハ右近の馬場の花を

詠めりやと有れば白雲の行くあかるのや
しる人探りし雨は降ぞぬ者をあし(く)
しめる花の陰ならいざや宿らん
松かさの行急もかんゆる精よりが野
の森もちかつくや右近の馬場よ
急ぎ候ほどに 急ば程よ早つゝや
右近の馬場よ着きて候あれをみれば

花見の人ゝと見えて車をあまた
輿をつきぞ誠に面白き景色やさふらひ
花を詠めむやと有れば 春風桃
李花のひらくる時人の心も花やかに
おくれ出る花の空長閑成時
めぐるや 見渡せば柳桜をこきまぜて
まて錦をかざる花くるま くる春

毎よさそひゆく心もあくかるゝ氣色かな
花の車ハ重一重みして桜のもとよ
ひをりき右近の馬場にはまよひ
じがきも白つや紫野寺のあれ
さりもあゆみて宮静の寺の松
かりて松も末高き梅かえのたちえ
さみそくれは并のむら花車出る

目出たかりけるや地はつらゝんく
長閑なる比ハ春の花見とて右近の
馬場の並木の桜の陰踏道よやものハ
京や邑よ人家もとみて花あまたハ即
いとあまれハ木陰よ車をとゞめてよきとなり
もろひとこれハ女車の所からある昔
語まなるある右近の馬場のひをり

の日よりあふるゝ涙にもあらはれ見ん
ものまぬ人のつらひしくはあやなく
きのふや詠めくらさん是葉草の此
所にそ芒車をよそふとも更にまひ
あられなり　芝面白くちすきひや
右近の馬場乃ひをりの日向ひより
たくるま車の所へるある昔語りて

あるゝ今は又我身れ上よ葉草乃
行かあやあくわきそいさん思ひの三
社ある人なりしを　右様よおりあ
しこの堂乃其旧跡も宮あれも
今又かり様よさしさみ人もづ門あれ
もさぬ人あれは　咋花のよ小の
森にて　言葉をかりても

あら寺　見もせぬ人や花の友づく
だれもしらぬも花乃陰に相宿
してもろ人のいづれもあれく花
車の榻立てすれ本よ下り居て
いげやおもしろや花のもとよ露
世をのがるゝは羨ましく花
心引くも初めて縁あれいざ別て縁せ

百千鳥花にあかれゆくあしたぞ
すゝき羽よりやまれてう乃雲の
心あきやうの雲れこそあれ
うらやましや木々きゝや吉野の雲を
時めきる外の名残とよ誠も
都の雲の遠ことし霞やなほ嵐の宮
花の陰をよ咲そへて花探ね嵯峨の宮

所　花のころなれば色もまさりて紅梅殿やおひ松の緑よりあまさへてこゝよ松もみえたり　月影は雲もなきかいはなきさひしていさゝの里まのゆきのもりは見えずとも君の袖かさゝは幸れものことゝて車も玄や御輿寄せ　そ此花は桜居の右近の馬場なる

神業こそたつとかりける　ワキ詞　甚だ殊の
ゆゑやかくしも委く語り給ふ神
のは本地を尋ねまいらせしまゝを
シテ詞　神は我なり此神の末社と現じ君の代を守りの神とあらはし　ワキ詞　さてさては
有難やさては神とはおいて何事乃　シテ詞　あら
神ぞかやうに顕はれ給ひけん

さうしや花さいおき衣よいかなと
いまこの時まつことありや明れ
ば月も曇らぬひさかたの天照
神みくゐ桜の宮と顕き給ふ北野
けふくもの神とゆふべの雨晴て
月の夜花楽ともまち得られよかい
くれたまよまうや花よくれ生よまう

甲上ニテ
〽さらとても神の代乃ふくちうひさ
つきぬるしとて神と君と乃御
恵ミ深きありきよう餘やく
次上ニテ
〽もろくきれりしてき代を守るなる
右近の馬場乃そるとゆて花上亮よ
あきらかにして将軍九陌の塵よまう
わる神無和光乃陰もくもりあき

君乃威光も影たかく花もゆうかに
治る代もめでたかる代々めでたさよ
上歌
曇なきの天照神恵をうけて
は桜乃宮井と顕れ給ひ宮よ
北野の神の宮居よ花桜葉の
神とあらはれ曇らぬ威光を顕し
きぬの神もうきの花さかり月
も照して花の袖雪をめぐらし
神すゞしの手乃舞を女拍子を
うたふ声すゞかなる雲乃まで
花はたゞの枝も花もほころびけ
志るあれ慈ちゝふ治まる歌
花盛く東南西北も音せぬ浪の
ずれも名ぞよ小船の去れごいまる

水にかけをうつしうつる
ろに桜衣らきさねし情にあ
かりけれはてゝ花鳥のともかはよかい
まり雲につなひきたるかにあるや
なれもをかはまあさるやくもれ
も風に非はあるを猶きまと

女郎花

ワキ詞 是ハ九州松浦方より出たる僧にて候
我未都を見す候程に此秋思ひ立
都にのほり候
住馴し松浦の里を
たち出てゆくすゑもしらぬひの筑紫
かいつしの路をはるはる旅の道杜
遥なれく　詞 急候程に是ハ早津の

男山濵とうやらん向ひに見えさせ
給ふハ石清水八幡宮にて御座候我等も
宮作の宮とは一拝あるへしまいらうや
と思ひ候又是成野辺に女郎花の今
を盛と咲乱て候立より詠めやと存候
扨も男山麓の野辺に来て見れハ
種の花さへ盛にて色をかされる露
をふくみて虫の音迄も心あるほとあり
野草花をおびて蜀錦をつらね桂
林雨をはらつて松風をしらぶ此男
山の女郎花ハ古今にもよまれたる
名草なり見もそとつハ家の産なれ
ハ花一本を手折んと此女郎花
の辺に立よりたれハ
シテ詞 なふ其花な折

給日そ花の色ハむなしき雲ゑにとし
借峰つく女郎と人。戯まよ名をさい
くたよ借者を契るとも人思ぶまして
や男ハ男山乃名をかけて咲きる女郎
花乃おまける花よ乱れて香も清かく
手折給ふ慈悲あつ捨人やれ　相法
我ハ女の成人をくまします世ハ先祖

咲乱れ乱きたる女郎花を八情ありて
情を第一社理あきら此卿への花守よりて
縦花守乃[illegible]ても書ます世法佛ハ出家
乃身あれる佛よ手向と思召。一本ハ
ゆるしゃへり　出家乃法乃身
様ハ佐よう向と思ふへまれとも僧
乃非本あもおとて手向よとず其外

古き寺にもわたらへかゝるさまをみる
たゞおろそかに三世の仏に花をあつるとも
へば殊更出家の法の力に社もれしもれしと
捨べきれ 出家を構よ古き寺をひらき
ければとて僧正遍照ばかりにめでてあはれむ許
ひとつ花とはよろこびきるぞ いや
得ぞハ社我一ちよきとへ人に語る事も

浮く悪人とも衣の弟郎と契る事は
是程とおぼへしとハ疑ひなきれハ是法
太刀をひきぬきて出家の身ならんハ御
説もしかるべきをけハたちまれなる
色香をめづる無心とかくやまふ心
あき眼にて帰るなどか本寺道
よ行られ あなやうくも古の古

言ひとはえしたり女郎花と
こゝつうゆきいする男山にたく
思ふと思へは詠の様人や花さ立てある
女郎花よりしる人の名にめでゝゆかし
や此一本に限り世に逢ひやましき色めきた
く咲く女郎花うしろめたくや思ふ
詠んじ女郎花とかきける花の名に誰偕老を

契りを成せば耶鄭のかりまくらぞ多き
五十の翁のためしもさなるべし
やしく　ワキ詞　此野邊の女郎花をば詠み入らく
ば八幡宮に参りし　シテ詞　此尉こそ候
と山上する者なれば八幡への御道
志ろへやしへしこそ前へ帰り給へ
御まゐりて貴くありがたき霊

二天 地 うれし山下の人家軒をならべ
和光の塵も濁江乃河水に浮ぶうろ
くづも生けるをはなつと深き誓
ひもあらたまつてめぐみゆたけき男山
御行道の有様は比は八月なかば
かいの[illegible]帯も撫子[illegible]もみ
あまの久かたの月の桂の男山く
げにやさやけき影は所から紅葉も照り
ひらく日影うけるみの石清水できよき
宮もたへなるやみつ敬は影うつる
ぞうしれ箱を納めあるは法乃神宮寺
お鶏かさし雲地られ岩松そよふ
さく山ひら谷回りて諸木枝をつらね
ねぐり鳩乃巣ありまでされ三千

世界もようかはらん千里も同し月
のあかのあきの玉垣みとうろの錦か
けまくもかたしきなしとかしこまる
畏へよろ石清水八幡宮なれはへ
絶ぬ流れ山へぞやまの葉て見へは郎
中へし　おなしく女郎花とよみし此
男山につきたる謂にて候か　あら

何とあやなくまよ女郎花の古歌をとひ
しく戯れをやはも侍るなく候
女郎花と申こそ男山に付たるいはれ
れなく候へ又此山の麓に男塚女塚と
て候をみせ申候へしこなたへ入て見
是ハ男塚又此方なるハ女塚この男墳
女塚につゐて女郎花の謂もいて見ハ丈

婦乃人の古ゆかり 早 「梅具ち悔
の人は国ハ何くぐ字ハめ中成人や阮
女ハ都乃人男ヲ此ハ播山ふ北の頼
風としれし人 きつまやいふ人を
語るもさひがありやさねハ文あき治を
語りまれなもとふひ乃使アと思ふの
かまふかきゆく月よきかゝわく夢乃

きくよぶ場よそりく 一夜かひ
男鹿乃角のつかの間さく陰より
みし毛魂もどふ海法の色ともく
南無幽霊出離生死頓證菩提
「あふ廣野人稀ありぐ我古墳あり又
何もの乎 骸をあらふ猛獣も
禁するよあそひ 「まつりやます

も萱の秋の風　女上「うら淋しくぞなる
塚の　シテ「うらつきよりもなき波
地上「さしも男女郎花の物語
顕はしたりあらう経の御法やなほ
地上「夢のごとくに亡魂のあらはれ給ふかなしき
女上「げによわらはは都に住みし者　シテ「頼風
に契りをこめしに少し契りのさはり
女上「あるべくまでを誠と思ひけるか　女ごゝろ
のはかなさは都を独りあくがれ出でて
なほも恨みのあまりに放生川に身を
あへなく成　シテ「頼風是を聞付て驚き
行きて見ればあへなき死骸ばかりなり
女「なくなく死骸をとりあげて此山本に
土中にこめしに　シテ「其墳より一本の

あへし一本生ひけり頼風心よ思ふよ
やう扨は我妻乃女郎花よ成りける
よと猶花色もなつかしく草乃袂
も我うても露かまうめく立よれ
ば此花恨たる氣色にておとこ乃
よればなびきのきまた立のけばもとの
ごとし　爰によつて貫之も男山

乃昔を思ひつゝ女郎花の一時をくねる
と書し水くきの跡の世迄もあはれ
すや頼風乃時よ彼氣色を
思ひよりはかなやあはれ我故よしなき
水の泡と消えていたづらなる身と成も
ひとへよ我科ぞかしとうき世よ
住あへてもなかし道よ長しめぐらく

上ゲテ つゞく此川に身をなけきて はかなくもよ
土中にこめしより女塚に対して又
男山と申すなり其塚の主ハ我
まぼろしながら来りたり跡弔ひて
たび給へ 地 あら閻浮恋しや
上キリ 邪婬の悪鬼ハ身を責て其
念力の道もけはしき剣の山の上

に恋しき人ハみえたりや嬉しやとてゆ
きのぼれバ剣ハ身を通し盤石ハ
骨をくだくこハそもいかにおそろしや
剣の枝のたわむまでいか
成罪のなれる果ぞやよしなかりける
花の一時をくねるも女郎花
づれそうてなかや花の縁によりうかべ

てたひ給へつきを浮へてあひ給へ

關寺小町

次第 待えて今そ秋にあふ星の祭

を急かん ワキ詞 是ハ江州關寺の住僧

にて候 今日ハ七月七日にて候ほとに

織女の祭をとり行ひ候 又此山

陰に老女の庵を結ひて候か哥道

を極めたる由申候ほとにをさなき人

せきのひかば若菜物語なども衣かへや
とやし ふけくたる涼風と書
鬢と一時よ来る初秋の七日の夕へ
まちやわびぬ 織女の手向とて
糸竹呂律の色々よ ことを尽して
おもふ仲の逢をかねあひの糸の数々
くゝ織や錦のうちはすゝき花色も
うつく秋草の露の玉をかざしける
をも松虫もわれ柄の手向にかはる姿へ
すれく あはれなる一節をそへけれ
此秋のあはれの草の夜のちらくを
かくばかりともさよめよ便ありて花を
風のままよるべなき井手まかせよはひ
より柳は風にまかせぬはなく 緑なる

やしたまへり人ハ更にあやまつことあらじ給ひ
にハ老の鶯乃さく桃乃声へくれ去
背に帰る秋をあしおもうかりきひ
しやくいうた老母に申へきなり
のは是ハ開寺に住者なくば此寺の
児達ゑを御知恵古まておもひ老女れ御
るは花さて絵ひ書を読へき様なるも

とひかじよりめ語なきも形きんためには児
達も是に依出まては 是を称ひ
もようぬ事なき形ぬ掘り埋まれ人ハまれ
ぬなりとありて花簿ほにもひへきなし
をあるに心を種として言葉の花を
書に文をなしおどろ甚かうそいたらんや
さしもわきかきへてれば心にすまえは

物語 「ワキ ちかくあまねく人の翫ひハ難
は津の哥ともつゞく手習ふ人の始めを
まへきよしゆえあるよ 「シテ 此哥ハ神
代より始まれを文字の数定まらずして
ごとの心わきがたかりきしかるに人の代と
かくめでたかりしよりこそ讀治めし
詠哥あれハとて難波津の哥を翫ひハ

「ワキ 安積香山乃言の葉ハ大君の御心をや
はらげしためしよりぞよみてこそ詠哥よ
なれ 「シテ 実よく心え候ひつ此二つの哥を
父母として 「ワキ地 手習ふ人のはじめと成て
「シテ 高き賤しき人をもわかず 「ワキ上 都鄙遠近の
国の民人や 「シテ中 翫ひときハめん
迄も 「ワキ下 もてはやす 「 あまねき心の

上 ゆら〳〵浪やさ夜のまくらハつくるもさびしく
よせもとの塚ハよりも盡し青柳の糸
うへを松の葉のちりうせぬ種ハ心と
思ひ名を花とひ時うつることはなきの
言葉をしたへとりのあともつきせ
しや〳〵 地 言葉のかゞみさへ人の
浅香山しといへる世の言葉ハまれなる

君のうるなれしすくなからうえ
我せこがくべきよひなりさゝがにの蜘
のふるまひかねてしるしも是ハ女の
哥なり シテ 是ハ古衣通姫の御哥なる
衣通姫と申ハ允恭天皇の后にて
御まへ形のごとく 和歌も長流をと
りて学ひ給へ 地 扨ハ衣通姫ハ流れをま

あひ絵にうやゞし筆写したる小野の
小町こそ衣通姫の流とハうきされ
侘ぬれば身をうき草の根を絶て
さそふ水あらばいなんとぞ思ふ　是ハ
小町の哥の心　思ひハ大江の根章ら
心からうき事よ世中おもふかゝりしよ
文屋の康秀が三河守に成て下りし

時田舎まで心をも慰めよかしと我を
さそひけるよみし哥あり意ハ
年を經てあとまけし假乃古てとれ
また思ひつる也　されよ　かつさやお
侘ぬれバの哥ハ我よそにもしと答る
ぞ衣通姫の流とぞいへるも小町也
ぞ業平をうみつるよぞ考母かもらし

なかとしくハ疑小町のなかゝる若ま此
世よかくへきあれハ今ハ老の行もく
御身ハ小町の果とよバれつるあつ
さましきとよ　いや小町とハ恥しや
色ミえてと詠よミしかと　うつろふ物
ハ世の中の人の心の花やゆるさつりや
わびぬれハ身を浮草の根をたえて

さそふ水あらハ今もいなんと思ふ
げにや　つゝめとも袖にたまら
ぬ白玉ハ人を見ぬめの涙の雨ふる
ことを思ひ草の花しほまたる身なれ
ちらくと行末ゝ露の名残あれ
思ひつゝぬれはや人の見えつらん夢とよ
むかしも今ハ身の上よおもへきめる

年月を送りけるにあまたの露
ゆき霜にきえて草葉に哀し出れば
もうれたり其命既にかぎりとあるて
唯槿花一日の栄におなじ
クセ
あるはなくなきは数そふ世の中に哀れい
つまの日を歎かんと詠じし事も我
おのづからまで草の花散りし望ち

ても猶りけるは露の命成けり
恋しの昔やしのばしのいにしへの身やと
思ひし頃だにもはや古事に成行
身の積て今は又つめれ若さひ
しき衰へいにしへはさぞ扨とまりし
宿をもたいまつとかざりがさる玉花
きよくどは水精をつらねつゝ鸞輿

扇車の夜の衣をかへりて敷妙の
枕づくつまやのうちにて八重の錦
のしとねのかさねしあれとも
くらへよ嫁のてや去まで數席あらん
開寺の鐘乃声諸行無常とひゞき
れは若いは老くもなし逢坂の山
風の是生滅法の理りをもえてそ

ぞ花落葉まれわりくはすきる前とて
草乃戸に硯をならへつ筆をとまらく
もしほ草かくやことの葉にあまくらよ
気なるやうよもくつまよかならぬ
婦のなあれはくだきて若きそれよ
わかゆく果そかれきい 見訳 めやよや
織女乃鶯遅かりし登女をも伴ひれ

かはへいはよ老女七夕の姿を作出
きそち戯らく いやく老女なるハ粧
みそはゆかしきもよふの何乃苦
さうひへきりがらとへとよ 織女
織糸竹の手向草ぶしやうしかく
きうよのつゞ小町の百年よみや
あまつ星合ひの雲の上人よ到らし

袖も今ハあさい衣のおばしまや痛もし
やめもあてられぬあき程中過し霄七
夕のつゞ手向れのひもものあれバ
糸竹よかきてめぐるの盃れむきとうを
たるぞ童舞乃袖乃面白き星祭る
なり糸竹の聲さへてもせめ行
ますますいくふしちそ萬歳楽

シテ詞「面白の乙女の舞の袖や、我も昔は豊の明りの五節の舞姫の袖をこそ返ししか、是は又七夕の手向の袖、あらはせしおさなやうかへきに狂人とも、まハ不狂人もよそ目とや見るらん童舞の袖よしなや狂人狂さらん

百年は　地「百年は花に宿りし胡蝶

の舞、あはれ老木の花の枝、ひらと袖も手もたゆたる腰もよろよろ、たゞよふ波の立まふ姿ハひらめくへきを、昔に返す袖はあるまじの狂、はやうへやあはれ、去年よ初めのみか、シテ「憂き、地「夜もや明方の関寺の鐘、鳥も、告わたる東雲のあさ

みもちはもつれの柱乃くい
これもようもあらしげく夜やてゆる
そて枝よをかりてよそくとぎ草の
わかやよ縁まきり百年乃跡と
いやしハ小町か果の名かきかしく

二人静

平ヲ
是ハみよし野勝手乃御ぜんよつ
かへ申者なきハ揖も当社よせさい
御神事乃様これ有中ゆも正月
七日ハなつ三の川より若菜をつませ
神前よ備へ申しば今日よ相務まうり
てハ類よ女中よ申付おつ三川へつか

いかにもやと存候はゞやがて女おもよ。
菜つみ川へ出よと申候へ 〽見渡せば
松乃葉白きよしの山 いくよつもり
し雪ならん 三山には松の雪だ
に消なくに都ハ野辺のわかな摘
頃にも今やなりぬらん思ひやる社床し
けれ 木芽めもはるさめふるとても
猶消がたき此野辺乃雪の
下なる若菜をバ今いく日有てつま
まし 春立といふ計にやみよしの
山も霞て白雪乃消し跡こそ道
となれ シテ女詞 なふ〳〵あまた成人
申べき事乃候 ツレ いか成人にて
候 みよし野へは帰りなば言伝

やらん　ワキ「何事にて候ぞ　シテ「三筆
野にて当社家の人々ずめの人とよ
も言傳やうばはまわらハう羅葉の
經のあはしく又ハ一日經かいつく我弘法と
ひてたび絵へと能く行人へ　ワキ「甚た
うろしれたり色をば行ひやうず傳を言ハ人
しずおぼつけ名をハ難とやへきぞう

シテ「先こそ此由仰はひてば筆も影なく人あ
らバまづ時つらハたとよつ手で安く
名をとハる家ならしかバまひてよく
よしき筆へと　ゆふ風まよふあふ雲の
ぞきの水茎の筆の跡かきそへむやう
よぞせよきりく　ワキ「かくるゝ
うつきる持んのねぶ息海の此由をさとらさ

いやとよさらばいさや帰りては
行とて遅くかへるさの　かき
あるまゝひて遅くなりてん　掛い
うやうあるらう　夏の夜河の邊の鳥の
まそて行くなど女の来るらひく
ぼりも罪業の強ゝしくへば一日経
かいて弔ひて給はれとよの人

みかは社家の人にてはやさかくひつき
たえは誠しからん確かに侍しとは思へたれ
行まことしかるもとてやうたてやな
侍しも頼もうひもなく誠しからは
さやうならばそのよしうたてそみよの花
さりとも雲と思へばきれかゞてきめまきも
やさしくも桜の花に影をはあらうもと誉

二六　四

うらめしの髪ひやあゝ　言語道断
かゝる所におそれもおそれ程気立てしハ
めやよ椚いやゝ成人の付うひる
そなたを名女郎踏でハ憾に吊ひ
てしまうきびへし　何もとうつましまう
きくさ判官殿に仕へやさう意
判官殿の行たのハ少き中すもがよ

夜ばの御家明まてハ供ゆたゆら
十郎拵改　万事の判安んのハ死骸
心静よ弔たちの腹きり胎よとて入
ずよ弟所し虫の者がハたうれなハ
あうきあわを　まてとハ我ハ世あまり
此山道へハ供ゆ家よて捨られまう
まきく縫め思ひの涙の袖　つまり

あら我なとをハ静に声たてゝつゝしや
扨ハ静ならてましまさや静にて
わらはゝかくれなき静の上手なく
あるかハ静をまつてちかんをさへ誦せとハ
聴よ耳ハかゝへし　我きうまひ
の讃歎をハ勝手乃御前に納し也
扨静ハ昔ハ何色そ　錺ハ精好

水干に　世を秋の野乃花つみし
色ハみしきの下ありそそ寶蔵を
ひらきされハ宝く錺ニ前もあく静れ
夜嵐乃ゞ色をたれてとく〳〵静へ
御前の静をれまひかなゞ背く寄
て御説之　宝まつりや我あ
かうゞ背き申ぬ心とて　かともあつか

しく思ふの時もありけり　静
かの舞　今みよし野の河の名の
菜摘の女と思ふなよ　河よどもさし山
陰なるもなつかしき弦の那　母も
義經きこしに夢かきれ既討手向ふ
とのゝしうはゞ小船に乗やがてまへ
渡邊より押渡らんとせしに海路の心に
任せ狂風に吹れてもとの地につき
るを天命と云へば科なりしも
科なきかと身を恨むるもの也
クセ
去程に次第〳〵に道をせばき成り
て此山に分入給ひし比は春和ハみよ
し野の花に宿かるまつものと
まちける夜嵐に誘もせぬ夢を

花もちりぢまとよ上一筆一称くまの
あまりある字母とそみ洗山をわち
てゆく むつ清水寺の天皇大殿
の皇子よせそちれらくば山よみそ
遊びまれてかきをと頼を存まひせる
はくらまぬみやぢのたやぎき西河
の龍がおちゆきを落ても浪ハ

かくるありぢおみてもみよしのゝた
のみをす陰乃花の雪をも左まぬ
奥山のをとさへりしき春のあの
月まれほろみそ雑あしひきのやま
みやまかき遊ひゆく有さ庵ハ唐土の
はらく花よふをを捨て揚子狩月よ
ゆきしもとらのうへよまつゆきに

花さかんにしてはあらしを惜む世年に
雲の衣もしろたへの袖だにはかなき
みよしのゝ山風にちる花迄も追手
にさそふや跡とめて尋よし野の
奥深く急く山路哉うれのをあらは
うかりし頼朝は石出かきしつか
舞の上手なりとぞ聞く有しかも

心もとらぬ舞の袖ひるがへすも
めぐる昔の時の和歌 賤や
しづやしづのをだまき
繰返し 昔を今になすよしも
がな 思ひかへせばいにしへも
恋しくもなしうき事の今もうらみの
衣川ふる流れめぐりてとはしつめぬ

武士の　あはれは浮世のならひあはれ
など思ひもよらで山がくれ雲よ
りさきの花のまつ風静かにあけを
とひ給へ

浮船

是ハ諸国一見の僧にて候我
此程ハ初瀬に候ひしが是より都に
のぼらばやと思ひ候初瀬山夕
越暮し宿もなくやゝ檜原の
よそに三輪の山もとの杉も立別
れとよふられもの出やすみ給

もなく夢のわたりやあぢきなやさこう
ち礼里みもおほよそきりく　急ぐ程
よ見へちや宇治乃里よ見えて山は皆
やまうひろ所なも詠めやと思ひは
業つミ船のよるはもがたつき浮
みうきうき心の科ぞとてたゞ
世をかこつも哀し　住そてぬ

もみぢうらめしき槿ぞうらめしき
き里の草葉も色の露をおきさえ
て老ゆく末もあとはゆきそめしの心
をも歎くありやよかくよそにめおき
よの影たのみも　月日もうきよ
行末のつくよ訴のみひかれ
頼もかきてみぬ縄あるやる世とも

いのりましく　ワキ詞　めてたよ是なる
若は寺に人のきたるなれ　女詞　業平の事
かて候行事まく候そ　ワキ　業平の
の昔よりひて古へいかなる人の住給ひ
て候そ妻は物語候へ　女　業平は住之
大將しきてみてなへは妻きかせても
きらひ人去ありし　業平は浮

上哥　あらや昔の住給ひしとなり同じ女
かくれなき我あれなき物もあらぬうきなれ
はりてかさまてハきりとうふかへりき
ワキ詞　ふしき物の物語世に名ある人ぬと
カヽル　の業平されさへ添てきう海まし
ば絵の事よ　女詞　むつしかるを
思ふや業のきもをひし人

上哥

三社あれば山の言ひ行くともひ給ふかう

はるきたまはつのくさかる舎き

たちはなの小嶋か崎を見渡せは川

より遠の夕煙立つ川風によ雲晴れ

峯より出る月の色もそひて山ハ鏡をかけ

き廣くも見えてきよふる朝とあさと

あさをとうちと思ひはやしかし浮舟

のはらの妻此物語之へ

クリ地

抑此物語

と申は其品々も妙にして其の心

廣きれハ見ろひといもえの葉の

サシ女

露の數々もあるなるものゝ中にし

よしや數まへきまつ此里に古人を

あまり信名白きるたくひあらさる

此浮舟ハうる中將のかりうつめよすへ

クセ

おもひおける人からもあつく
心ざし深うしておほまことのうちに信し
をとおもひけるあさき世の人のほのめかし
ぬるをもとのうきなかく兵部卿の宮
きん恩ひく寿てわせしよそめかわき
のうら霞あき霄の人めも悲しくていゝ
まみへつてわきもいとかひなし

わきまへやくよよ横も山住のめつらか
所ある横風よさそて有明の月池
登る雁するよ水の面も雲のあく
船にちりとめしゆくゑとて汀の氷かな
らかく道の通ひそかしもあきうら
ぬれ契りありてかへし長閑にてやく
うるほしつる思ひあり瞳の詠めとかしみ

もの深し雨や増りきんとよつくよ思ふ
思ひ此世にはなくもがなやと歎き
し末はもつて終によるべなく成
よりく　ワキ 浮舟乃はかなき妻派ぬ
ぬやうすは所にに住人乃　女 思しは
所よりよ南ひものをおほせやかな
極る小野乃者款のつきまとひ給へ

シテ 恥かしや何とや鏡そとたのひる
横川の僧都に尋ねては誰とか尋ねべき
女 かくれなき人也し大ひえの杉れ志るしはかな
きれた横川の水のに、もれをとりたし
さりし尋ねへし　猶おのきれたるよ
そひて悩むりあんふなりはかを
頼みおひつくあまよりく侍やるんと

うきたつ雲の[illegible]く行方志らぬ成
よるりく　ありて小野よハ我れ住に
つるぞ宿と云もへきし　所のたよりへて
のあはれもなく草の枕ハ理ありやさよひへ
家に經をよみ玉ハ古跡をとふらふやく
下哥
あさき影の晴ぬもなく浅間よう人定
めぬ浮舟の法の力に轉せてありがたさ

去や本より我ハ浮舟のよるかわり
てたゞよふ世ようき名をハんと思ふ
まひ浮世になくもあかつきやと明暮
思ひ身ハひとへに人をかねハたのミしよの書
戸をもさもれち出る庵の風もきやうに行
浪あらきにこえしよばゝる宿のよすがを
きつふバいまひゆくと思ふよりハ心も

色よ成りて あはれきくさの事
ことしなく 秋のれきしきをもあきらめや
濃ましや あさましや あさましたちもれ出ぬ
小鳥の色はかはらじを 洗ひきみう
よく〳〵思へば大慈大悲のちかひより
かくよよひろきれとみすよつてうろ
さらよきさひびそて出る日の
散りぞたらぬきらとあつさつて咲きては
やそよまにみへきたれよかきて頼しよ
頼みこしまくの観音の慈悲く初瀬
のたよりよ権門の僧都よまつきれ
つ小野よとも あひ行きもちらして
ものきのそも夢のよにれぐらし
みえてはひしやようかの杖のかるさ

るとも夢にあらはれみえ給へと
洗ひもてなほしたよりに弔ひ給へ
と云しは思ひのまゝに執心晴れて
都率に生るゝ事ぞうれしきと
思ひは明けようらゝかにいふと見えしは明くる
横川の杉の嵐や残る杉の
嵐ぞやのこるらん

右之本者観世太夫織部
章句眞本令板行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛